

1. 「フランスの高大接続からのヒントー思考力・表現力と内申点の評価ー」

立命館大学・文学部 准教授 細尾 萌子

(1) はじめに

はじめに、自己紹介を兼ねて、私の問題関心をお話しさせていただきます。日本では文科省が戦後、大学入学者選抜実施要項というものをずっと出してきましたが、そこでは一貫して、大学入試の次の三原則が掲げられてきました。

一つ目が、能力・適正の原則、大学教育にふさわしい者をとるということです。二つ目に、公正・妥当の原則で、公正性や公平性を担保するということです。三つ目に、高校教育尊重の原則といって、高校教育を变にゆがめないということがずっと掲げられてきました。しかし、実際には、この三つ目の原則がうまく果たされず、むしろ逆に、高校教育は大学入試に乱され続けてきたという歴史があると思います。例えば、大学入試で出ない、いわゆる副教科が高校生に軽視されたり、高校で知識を活用するようなグループ学習をしたくても、それは大学入試に出ないので保護者から「しないでくれ」と言われたりするなどです。

そこで私は、むしろ高校教育の発展を助成する、高校教育を発展させていくような大学入試を実現したいという関心を持っています。フランスのバカロレア試験に関心を持ったのは、バカロレア試験は高校教員が主体の試験だということが面白いと思ったからです。後で話しますが、作問も採点も、基本的に高校教員が行います。

そこで10年ぐらいバカロレア試験の研究をしてきたのですが、バカロレア試験を支えるフランスの評価の考え方については、『フランスでは学力をどう評価してきたのか』という本にまとめましたので、もしフランスの評価の考え方は面白いなと思ってくださる方がいらっしゃいましたら、こちらと一緒に見ていただけますと嬉しいです。

今日、お話ししたいことは、二つのことです。一つ目は、日本の大学入試は大学教員が行うのが当たり前のようになっていますが、そこに高校教員が参画することを検討してもいいのではないかということ。二つ目は、公正性という概念について再検討する必要があるのではないかということ。その2点になります。

今、日本で高大接続改革が進んでいます。大学入試の改革などが進んでおりますが、各大学の一般入試について、二つの問題が指摘されています。一つ目は、知識の暗記や再生の評価に偏りがちだということです。二つ目は、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめる力や、その過程や結果を表現する力が十分に評価されていないということです。AO入試や推薦入試は、「学力不問」とも問題視されています。

そこで、皆さまご存じのように、各大学の入試を、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する選抜法に改善することが求められています。

フランスの大学入試であるバカロレア試験は、200年以上も論述試験が中心になっており、まさに、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめる力を評価してきたと言えます。そのため、バカロレア試験は、思考力・表現力を評価する、日本のこれからの大学入試の一つのモデルにな

り得るかと思います。一方で注目したいのは、フランスでは2021年から、バカロレア試験の40%を高校の内申点で評価する制度に変わるということです。高校の内申点が大学入学の重要な要素となります。

日本にとっては、内申点というのは一般化しているので、自明の、当たり前のことかもしれません。内申点の導入は、フランスにとっては重要な意味を持ちます。なぜなら、フランスは共和国なのですが、内申点導入というのは「共和国の学校」、フランスの学校そのものの部分的な崩壊も意味し得るからです。

バカロレア試験というのは、フランスの市民としてこういう力を身に付けてほしいという、国家としての統一の学力基準を示すものでした。バカロレア試験で問われる力を小、中、高と段階的に育成していくことで、フランスという共同体を維持・発展させる市民を育成するというのが、学校教育の建前でした。

しかし、内申点というのは国家がコントロールできません。というのも、フランスでは、教員の教育方法の自由というのが学習指導要領で認められている教員の権利なのですが、各教員の評価の方法や基準は、教員の自由ですから、国がコントロールできません。内申点を国家が統一するということは、フランスではできないわけです。したがって、内申点を大幅に導入すると、国として同じ力を育てていくことは難しくなっていくわけです。

本講演では、フランスの高大接続、特に大学入試における思考力・表現力と内申点の評価に関する論点を整理して、日本への示唆を述べます。その際、日本の大学入試と比較しやすい普通バカロレア試験を主に扱います。

流れとしては、まず現在（2019-2020年度）の普通バカロレア試験の制度を紹介します。フランスは、学年の始まりが9月になりますので、学校の年度が年をまたがります。2019年9月から2020年6月までが1年間になるわけです。続いて、高大間で何が接続して、何が接続していないか、また、バカロレア試験に入る内申点は公正なのかということを検討します。最後に、日本への示唆を述べます。

（2）現在（2019-2020年度まで）の普通バカロレアの試験

フランスの学校は、基本的に3年制の保育学校、幼稚園、6歳で入学する5年制の小学校、4年制の中学校、3年制の高校、さまざまな高等教育機関から成ります。大学の学部は3年制です。バカロレア試験は、高校2年生の最後と3年生の最後に全国一斉に実施されます。ほとんどの試験は3年生の最後にありますので、実際は試験一発勝負という性格が強い試験になります。

合格者には、中等教育の修了認定と高等教育の入学資格を兼ねる「バカロレア」という資格が与えられます。この試験に合格すると、基本的にどの大学にも入れます。日本のように各大学が選抜試験を課すということはありません。

2017年の合格率は、全体で約88%です。バカロレア試験は論述試験なので、難しい試験というイメージがあるかもしれませんが、実際にはフランスの高校生の9割が受かっています。

高校2年生、3年生は、表1のように、複数のコースに分かれています。バカロレア試験は、このコースに対応しています。高校には、普通科、技術科、職業科の三つのコースがありまして、普通科は普通教育中心、職業科は職業教育が中心です。技術科は、その中間と考えてください。

バカロレア試験もその三つのコースに対応していきまして、普通バカロレア試験、技術バカロレア試験、職業バカロレア試験の三つに分かれますが、さらに細かく、系や専門領域に分かれています。

普通、技術、職業のどのバカロレア試験に合格しても、大学に入学できます。職業バカロレアに合格して大学に進むということも可能なわけです。ただし、大学入学者の多くは普通バカロレア取得者です。技術バカロレア取得者の多くは、就職にすぐつながるような資格が取れる短期の高等教育機関に進みます。職業バカロレア取得者の過半数は就職していきます。

普通バカロレア試験では、表2に示したように、高校で履修したほとんどの教科、12～16教科が出題されます。表2は理系のコースの場合ですが、数学や物理・化学といった理系の教科だけではなくて、フランス語や歴史・地理、哲学という文系の教科の試験もあります。すなわち、高校で学んだどの教科も、いわゆる捨て教科にはできないということです。もちろん傾斜配点はありますが、どの教科の試験も基本的にありますので、全ての教科を勉強しないとはいけません。

この全教科の平均点が、20点満点中10点以上で合格となります。合格者には点数に応じて、「秀」「優」「良」の優秀判定が与えられます。試験の中心は、自由記述式の論述試験です。日本のセンター試験のような選択肢問題もありますが、非常に少ないです。

初めに申し上げたように、バカロレア試験では、作問するのは高校教員です。しかも、レベルの高い高校の教員だけではなくて、さまざまなレベルの多様な高校の教員が作問します。試験問題は全国共通です。

図1のように、各教科の問題作成が大学区という地域ごとに割り振られ、各大学区に委員会が設置されます。視学官という、日本でいう教科調査官に当たる行政職の人と大学教員が長なのですが、委員は多様な高校の教員です。委員は高校の学習指導要領に基づいて作問します。

なぜ多様な高校の教員が作問するのかということなのですが、バカロレア試験が創設された1808年当初、作問者は大学教員でした。バカロレアは大学の第一学位であるからです。バカロレアが大学の第一学位ということは今も同じです。

フランスの大学教員は高校教育のことをあまりよく知らなかったもので、大学教員が作問した結果、バカロレア試験では、高校の教育内容の範囲を超える大量の知識が問われていました。論述試験で知識が問われるというのは意外に思うかもしれませんが。例えば、1853年にラテン語作文という科目があったのですが、ラ・フォンテーヌという17世紀の詩人の寓話の「樅と葦」の筋をラテン語で物語りなさいという問題が出ました。ラテン語作文はラテン語の力を問う問題のはずなのですが、ラテン語の力があつたとしても、必ずしも高校で学ぶわけではない、この「樅と葦」の話の筋を暗記していないと答えられませんでした。

当時は出題される作品のリストが事前に公表されていたので、出る作品があらかじめ分かっているわけですから、その内容を暗記していたら、ラテン語が分かっても正答できました。そのため、高校では、暗記偏重の受験準備勉強がはびこっていました。受験参考書で丸暗記するわけです。

この受験の弊害を克服するために、バカロレア試験の問題作成に、大学教員だけではなく多様な高校教員を参画させようということで、大体80年ぐらいかけて少しずつ、高校教員が参加するようになってきました。1986年以降は、先ほど申し上げた委員会が多様な高校の教員が作るという制度が確立されたわけです。

作問だけでなく、採点をするのも高校教員です。バカロレア試験では論述試験が多く出されますので、論述試験の採点が人によってバラバラだと良くないということで、モデレーションの制度ができました。採点者間で採点基準を調整する制度ができました。

各大学区に三つの委員会が設置されます。まず、試験終了後に採点者の一部が数枚の答案を共同採点します。ここでは評価の規準（評価の観点）を決めまして、これを大学区の採点者全員で共有します。これが合意委員会です。その後、大体1週間から10日間ぐらいで採点するのですが、終盤に採点者全員で調整委員会を開きます。ここでは、採点結果を統計的に調整します。採点期間終了後には、合否判定委員会を開きます。採点者間で採点結果を比較して、ばらつきが大きい場合は低いほうの点数を上げます。また、内申書の成績がバカロレア試験の点数よりも良い場合は、20点中9点など、合否ラインにぎりぎり達していない人の点数を少し上げることができます。下げることはいけません。

このように、評価規準の共有や、採点結果の統計的調整、内申書の斟酌による調整というモデレーションが行われていますが、こういうモデレーションで採点が本当に統一されているのかという疑問を持ちました。そこで、クレティユ大学区の歴史・地理の高校教員にインタビューをしますと、クレティユ大学区では、評価規準は採点者で共有しているということでした。

例えば、地理の「資料セットの検討」という問題では、四つの評価の観点が共有されたそうですが、各観点において、どの程度できれば何点を与えるかという、評価基準、すなわち各観点について求める水準は採点者に委ねられていたそうです。

ループリックのようなものを作ればもっと統一できるかと思われるかもしれませんが、そのような評価の基準、各観点についてどこまで求めるのかでも決めてしまうと、その評価基準を作成するときに想定できなかった創造的な良さというのを評価できなくなると言っていました。

ちょっとデータは古いのですが、フランスのメルルという人が採点者にインタビューをしたときも同様の内容で、特に文系教科では、評価基準について合意するのは難しいという回答が多かったそうです。

例えば、「分析する」という観点を共有したとしても、分析するというのは、例えば歴史・地理で分析するのであれば因果関係が大事だと思いますが、事実、原因、結果の三つとも述べて初めて分析したと言えるのか、事実と原因のみでも分析したと言えるのかなど、求めるものが人によっておれています。それを無理やり強制するのは難しいそうです。

以上のように、モデレーションの制度化によって評価の規準（評価の観点）は採点者間で共有されるようになりました。しかし、各観点における要求水準、どこまで求めるかという評価規準は採点者に任されていて、統一されていません。それは、想定外の良さを評価したいという教員の考えなどがあるためです。要求水準は、採点者間で統計的に少し調整、しかも上方調整のみしているということです。なぜ点数を上げる調整ししないのかは、後で述べます。

(3) 高大間で何が接続して、何が接続していないか

次の話に移りまして、高大間で何が接続して、何が接続していないのかの話です。

バカロレア試験は、高校の目標の達成度が大学教育を受けるのに十分かを見る大学入学資格試験なので、本来であれば、バカロレア試験に合格した人は全員、大学教育をうまく、最後まで終

えられるはずですが、しかし、バカロレア試験に合格していながら、多くの人が落第しています。

大学新生が2年生に進級するときに、3割が落第します。また、3割が離学といって、いわゆる中退してしまうわけです。特に技術バカロレアや職業バカロレアの取得者、高校で職業教育を中心に学んできた人の落第・離学率が高いです。ただし、バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高くなります。また、大学の学問領域によって、落第・離学の割合は異なります。特に職業バカロレア取得者が多く進学する経済系のコースの落第・離学率が高いです（くわしくは表3・4・5を参照）。

バカロレア試験に合格しているのに、なぜこれだけの人が落第や離学をするのか、学業に失敗するのかということで、従来、二つの要因が指摘されてきました。

一つ目は、進路指導の問題です。中学校や高校で進路指導が不足しているということです。生徒は自身の関心、大学で何を学びたいかではなく、自分のレベル、日本で言う偏差値に対応するようなもので高校のコースを選んでいきます。そのため、高校のコースと大学の進学先が対応していません。

学力が高い生徒は、文系であっても普通科の科学系を選び、学力が中くらいの人は、理系であっても普通科の経済・社会系か文学系を選び、学力の低い人は技術科か職業科を選ぶという傾向にあります。普通科科学系の生徒の40%が大学で理系のことを学びたくないと考えているという、悲惨なデータもあります。大学のほうでも進路指導の努力はされているそうなのですが、留年や中退を減らす効果までは出ていないということだそうです。

二つ目の要因は、高校と大学間の教育内容のねじれです。特に、高校技術科・職業科では職業教育を中心に学びますが、大学では普通教育、しかも抽象的なことを学びます。この内容がずれているということです。もちろん、それは高校生たちもほとんど全員が知っている、周知のことなので、技術バカロレアや職業バカロレアの取得者の多くは、大学ではなく短期の職業系高等教育機関を志願するのですが、そこは大学と違って、入るときに選抜試験があります。

フランスも、ここ最近ずっと不景気ですので、大学を卒業しても就職できないということもあります。短期の職業系高等教育機関に行って職業資格を取ったほうが就職につながりやすいという傾向もありますので、普通バカロレアの取得者が、大学に行かずに、こちらのほうを受けてしまうことが増えています。

そうすると、普通バカロレア取得者に比べて学力面で劣ってしまう技術・職業バカロレア取得者の一部は合格せず、仕方なく大学のほうに進みます。大学は入るときに選抜がありませんので。今まで職業教育のことをたくさん学んできたのに、大学でいきなり抽象的な普通教育を学ぶわけですから、そこでギャップが大きすぎて落第するという、残念な「ねじれ問題」が起きているということです。

しかしながら、この二つの要因に当てはまらない落第もあります。普通バカロレアの取得者で、大学の学問領域と類似したコースの出身者も多く落第しているのです（表6）。

普通バカロレアの文学系を取って、大学では文学や人文・社会科学に進む。普通バカロレアの経済・社会系を取って、経済・経営学や社会科学のほうに進む。普通バカロレアの科学系を取って、生命地球宇宙科学や応用科学のほうに進むといった人たちがいます。この人たちが高校と大学で学ぶ内容は似ているはずなのに、落第・離学率はそれなりに高く、落第率が2割くらいはあ

るわけです。

彼ら、彼女らは、大学で学ぶ内容の基礎を高校で学んでいるはずなんですね。ですから、従来説明されてきた進路指導の問題や、教育内容のギャップというのは当てはまらないのですが、なぜか多くの人が落第しています。

それは、普通バカロレア試験で問われる力と大学で求められる力が乖離しているからでは、という疑問を持ちました。そこで、普通バカロレア試験で全員が受ける歴史・地理のうち、2006年の地理を例に、バカロレア試験問題と大学の成績評価のそれぞれで問われる力が連続しているかどうかを分析してみました。

今と2006年では試験の制度が違うのですが、当時は、地理の場合、小論文2問と「資料セットの検討」1問から1題を選択するという制度でした。このうち、「資料セットの検討」という、いくつかの資料を検討する問題を分析します。

表7に示したとおり、この問題は2部から成ります。第1部は、資料を分析する5問の短答問題です。第2部では、第1部のいろいろな解答と複数の資料内の情報、自分が持っている知識を総合して、「アメリカ：グローバリゼーションにどのような役割を果たしているか」について論述するという問題です。ここで、典型例の一つとして、第1部、第3問を検討します。二つの資料を基に「アメリカの金融の流れを特色付けよ」という問題です。

この問題では、以下の四つの力が求められています（**資料1**の模範解答を参照）。

第一に、情報の取り出しです。「アメリカの海外直接投資」という図から、「西ヨーロッパとアメリカ大陸に主に投資している。一方、アフリカやアジアへの投資は活発ではない」ということを読み取る。また、「世界の金融システムにおけるアメリカの役割」という文章から、世界通貨であるドルと貿易赤字の関係を読み取る。

第二に、資料内の情報と知識から、必要なものを選ぶ力も必要です。

第三に、先進国からは相互の投資で、発展途上国からは借金の利子で資金を得ているという概念に基づいて、選んだ資料内の情報と知識を関連付ける力です。

第四に、事象を海外直接投資の出入と融資の二つの要素にまとめ、その要員と結び付けて表現する力です。

このように、バカロレア試験問題のレベルでは、複数の種類の資料から取り出した情報と知識を取捨選択し、それらを概念に基づいて関連付けて、論理の構成や展開を工夫して文章で表現する力が求められています。

続いて、大学の成績評価に表れた学力像を分析してみます。例として、パリ第1大学の経済学部の科目、第1セメスター（この当時は1学年が前期・後期のセメスター制で、前期ということ）の必修科目の「一国経済の記述的説明」という科目を取り上げます。

この科目では、まず予習用教材で予習をし、教材の問いに文章で答えます。分からない点は、指導付き学習の時間に講義の担当教員の指導を受けます。この問いの解答が集められて、平常点が付けられます。次に講義が行われ、セメスターの最後に試験が行われます。この平常点と試験の成績は、それぞれ50%です。

まず、平常点評価のほうを見てみます。第1回目の指導付き学習の教材、「国民経済計算は役に立つ！」を見てみます。この教材は四つの章から成るのですが、そのうち、複数の資料を用い

て文章で解答する、1 (1) (表8) で示した教材で問われた力を分析します。

この問いでは、まず、経済成長に影響する項目などを資料から取り出すことが必要です。第二に、消費支出などのある項目の変化が「国内総生産」の成長に占める割合を国民総生産寄与度と呼ぶなどの、専門的な知識も必要です。第三に、複数の資料内の情報や知識から必要なものを選び、文章で表現する力も期待されています。

次いで、試験問題のほうも検討します(表9)。問題の形式は、次のア)イ)ウ)に分類できます。

ア)は資料を使わずに文章で答える問題、イ)は文章からデータを抽出して計算・説明する問題、ウ)は表からデータを抽出して計算・説明する問題です。

ア)では、知識を国債などの概念で結び付ける力が問われています。イ)では、資料2の模範解答のように、文章から取り出した情報と知識を、金融勘定と資本勘定の意味など高度の概念に基づいて関連付ける力が必要とされています。ウ)では、非金融法人企業の所得勘定の意味など高度の概念を用いて、表から取り出した情報を組織化することが求められています。

以上のように、複数の種類の資料から取り出した情報と知識を取捨選択しないといけません。たくさん何でも書いたらいいというわけではなく、問いについて必要なものだけを選びます。それを概念で結び付け、論理の構成や展開を工夫して表現する力が試されています。このような大学の学力像は、高度の概念を求めるとい違いはありますが、普通バカロレア試験の学力像に近いです。したがって、あくまでも試験問題で問われる学力の質は、バカロレア試験と大学間で発展的に連続していると言えるのではないかと思います。

では、一体何が断絶しているのか。取得した普通バカロレアと同じようなコースなのに、なぜ大学を落第するのでしょうか。それは、バカロレア試験の評価基準が甘すぎて、学力像どおりの評価ができていないからではないかという仮説を持ちました。

先述のフランス人のメルルは、バカロレア試験の採点のときの評価基準は、①行政的圧力と②同僚教員の圧力という、採点への圧力を受けて調整されていると指摘されています。

まず、①の圧力としては、合意委員会、評価基準を出すところで、視学官、日本で言う教科調査官という行政職の人から「あまり厳しくなく、寛大に採点してくださいね」という勧告が出されます。

②の圧力は、教員間の見えない、空気みたいな圧力です。採点期間中に、どのように採点しているかを教員同士で非公式に相談するんですね。そういうときに、「厳しすぎでしょう」と言われると、採点を甘くする。もしくは、調整委員会で採点の分布グラフが出されてしまうので、「厳しすぎ」と言われると、委員会全体の平均が揃うよう、低い点を上げることになるわけです。こうした圧力、見える、見えない圧力による加点は、「80%目標」という政策目標を受けて、1990年代から散見されるようになったそうです。

「80%目標」というのは、高校最終学年に到達する者の割合を当該年齢層の80%に伸ばすというものです。フランス人の80%を高3まで行かせるという目標ですが、そうすることでバカロレア試験合格者を増やして、高等教育に行く人を増やしたいという計画です。これは今も続けられているのですが、バカロレア試験合格者を増やすためには、バカロレア試験を甘くしなければいけないということになっているわけです。

こういう事態は、国民教育省の職員のボッシュも指摘しています。実際に、2008年の哲学の

普通バカロレア試験に関する視学官の勧告というのを入手したのですが、確かに高い点数を付けることが促されて、受験者の理解度よりも努力を評価しなさいという含みが見受けられます。先ほど申し上げた歴史・地理教員のカスチーロも、合意委員会において、「視学官の勧告に基づいて寛大な採点をすると決めた（毎年のように）」と述べています。

以上のように、バカロレア試験問題と大学間で、求める学力像は、ある程度、発展的に連続しています。しかし、「80%目標」を達成するために、甘い採点を促す圧力がかけられています。バカロレア試験の採点者は、要求水準を下げざるを得ません。その結果、大学教育を受けるのに不十分な水準の者も合格するということです。このように、バカロレア試験の評価基準が甘くされて、試験で実際に問われる力が大学の要求する力と連続していないことが、落第・離学の一因である可能性があります。

先ほど述べたように、バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高いです。バカロレア試験で高い点数を取っている人は、大学でも割と成功しています。ですから、バカロレア試験の評価基準を厳しくさえすれば、落第・離学を減少させられるのではないかと思います。ですが、それには「80%目標」がネックになるのかもしれません。

(4) バカロレア試験改革：内申点は公正か

次の話題、内申点は公正なのかということに移ります。

2018年からは、入学者を高校の内申点などの学力も参照して振り分けるといって高等教育進路選択システム（Parcoursup）が導入されています。バカロレア取得者は大学に基本的に全入という原則が廃止されます（くわしくは注22の論文を参照）。さらに2021年から、バカロレア試験が改革され、バカロレア試験の40%を高校内の内申点で評価します。

これらの改革には三つの背景があります。

一つ目は、受験準備勉強の緩和です。今の制度では、基本的に高校3年生の最後にたくさんの教科、十数教科の試験がありますので、高1はサボっていても、高3で必要な知識をガツと覚えてしまえば、取りあえず合格できるという現状にあります。このように短期間で知識を詰め込む受験準備勉強を緩和したいということです。

そのためには、主に高3の最後に試験一発勝負をさせるのではなく、高校での学習成果をもっと長期的に評価することで、高1、高2、高3と継続的に、ずっと学習できるようなモチベーションアップをしたいということがあります。

ただし、これは形式的な見かけの理由でして、政府としては二つ目の理由が本音だと思います。要は、コストダウンです。バカロレア試験は非常にコストが掛かっています。2900種類作問しますし、答案の採点は400万枚あります。これに高校教員が動員されますので、高校教員は試験期の6月はこれにほとんど掛かりきりになります。6月は、高校がほとんどストップするんです。機能停止に近いです。それはコストが掛かりすぎだということです。

これを内申点にすれば、お金も掛かりません。例えば、答案や試験問題を印刷するだけでもかなりお金が掛かっています。また、監督や採点の経費も馬鹿になりません。内申点なら、政府としては非常に嬉しいわけです。

三つ目に、大学入学後の留年・離学対策として、先述のParcoursupが導入されました。

そういうわけで、2020-2021年度からは、新しい高校・バカロレア試験制度が完全に実施されます。ただ、職業バカロレア試験は対象ではなくて、普通バカロレア試験と技術バカロレア試験が対象となります。高校技術科については、さすがに専門性が強いということでコースは残るのですが、普通科の従来のコース（文学系／科学系／経済・社会系）は廃止され、一つのコースにまとまってしまいます。「普通科」とまとまって、その中で細分化されなくなります。理系、文系というのはなくなるわけです。

改革後の高校2年生・3年生の科目は表10のとおりなのですが、理系、文系のようなコースがなくなりますので、高等教育でどういうところに進みたいかに応じて、例えば理系の学部に進みたいから理系の科目を選択するというように、進路選択を高1のときにしないといけません。高1で、大学でどんな学部に進んで勉強したいのかを決めないといけません。それが早すぎるのではないかという議論はあるかもしれません。

次に、普通バカロレア試験の改革内容に移ります。新しい試験では、高校の内申点が試験の40%、従来の最終試験が60%を占めるようになります。筆記試験は、今の16教科ほどから、4教科に減少します。内申点の割合がかなり高くなるということです。

内申点40%の内訳ですが、30%は生徒が履修した科目の共通試験の点数です。各高校の中で行う試験の点数です。10%は「学習記録簿」といまして、日本で言う指導要録、日常的な成績簿の点数です。共通テストは各高校で高校教員が実施するのですが、できるだけ平等性を確保すべく、次の三つの工夫が行われることになっています。

1. 全国共通の問題バンクから各高校が選択した問題で実施。
2. 匿名採点（生徒の担任教師ではない教師が、名前を見ずに採点）。
3. 採点者間で評価基準を調整（harmonisation）。

これ以上の詳細は全く未定です。2018年9月にフランスの高校教員の、組合関係の有力な方に聞いたところ、これ以上は全く決まっていないし、本当に実現可能かも疑わしいので、あと少しで始まるのに皆、困っているということをおっしゃっていました。

表11のスケジュールにまとめましたように、この公的な試験が年に3回、高2、高3のそれぞれ3回ずつ行われます。各科目の日々の成績も試験の点数に入ります。今の制度は、高2の最後と高3の最後に一回ずつ試験があるだけの一発勝負なのですが、それに比べると、成果を継続的に評価する制度に変わります。

バカロレア試験への内申点導入を巡って、大きく二つの論点があります。

一つ目は、受験準備勉強を収めるために、バカロレア試験に内申点を導入すべきかという論点です。内申点導入を巡っては、1808年のバカロレア試験創設後、間もなくから、200年ぐらいつつと議論が続いています。

先述したように、バカロレア試験創設当初は大学教員が作問していました。大学教員は中等教育の内容をあまりよく知らなかったのが、バカロレア試験では、中等教育の内容を超えるような知識も問われていました。その結果、高校では、暗記偏重の受験準備勉強がはびこってしまっていて、生徒は高校の授業を真面目に受けても意味がないということで、受験参考書の学習に没頭していたわけです。

それは良くないので、生徒をもっと継続的に、学校の勉強に集中させないといけないというこ

とで、内申点の導入が国会で検討されてきました。1896年、1897年にさっそく法案が提出されているのですが、いずれも廃案になります。中等学校には学校間格差があるから内申点の価値が中等学校によって違ったり、保護者や生徒が先生に圧力をかけたりするかもしれないので、公平性を担保できないということが理由です。高校改革に向けた1983年の報告書でも、受験準備勉強を抑制すべく、内申点の導入が提案されたのですが、導入には至りませんでした。

この内申点について、日本ではどちらかというと高校の先生は賛成の立場かと思うのですが、フランスでは逆でして、フランス最大の中等教員組合であるSNESは、内申点については断固反対という立場をずっと貫いてきました。反対の理由は次の3点です。

一つ目は、保護者が学校に圧力をかけ得るのは困るということです。

二つ目に、教師と生徒の関係が変わってしまうということです。今は、学校の先生はあくまでも教育者で、成績を付けるといってもバカロレア試験の点数を付けるわけではないので、教育者でいられるのだけれども、内申点がバカロレア試験に大きく入ってしまうと、先生は選抜者になってしまいます。そうすると、教師と生徒の関係が変質してしまいます。生徒が教師の顔色ばかり伺ってしまうようになります。

三つ目に、通う高校によって取得したバカロレアの価値が異なってしまうということです。フランスも高校間の格差が大きいので、例えば20点中、同じ12点としても、その12点の価値は高校によって違うので、同じように比べるのは不平等だということです。

このように、内申点の導入が絶えず提案されつつも、公平性の欠如ということや、教師・生徒間の関係悪化、また情実の問題が重要視され、導入はされてきませんでした。

二つ目の論点は、公正性の問題です。内申点をつける学校の先生は生徒のことをよく知っています。日常的な学習成果を評価できる内申点のほうが、一発試験の、匿名の外部の試験よりも公正なのかどうかという問題です。内申点か匿名の外部試験、どちらが公正か。つまり、生徒が移民出身かとか、女の子か男の子かとか、家庭の社会階層など、生徒の社会的背景や生来の属性といった学力以外の要素に影響されずに学習成果を評価できるのかという点についても議論が行われてきました。

この点についてはかなり意見が分かれているのですが、まず、内申点のほうが公正だという主張を見てみます。その理由は次の二つです。

一つ目は、日ごろ生徒に面している教師が、生徒の学習の質を最もよく判断できるだろうというものです。もう一つは、外部試験では、運で成否が決まる、というものです。その日の体調が良ければいいのですが、風邪を引いて失敗することもあります。内申点は、日々付けるので、一日風邪を引いたとしても、元気になったときに挽回ができます。そのため、運に左右されにくいということです。

一方、内申点は公正ではないと指摘する人もいます。というのも、内申点の評価は担任の教師が付けますので、生徒が今までに落第していたり（フランスは小学校から落第があります）、出身社会階層が労働者階級だったりすると、たぶん成績が良くないだろうという思い込みをしてしまうことがあります。全般的に、男の子よりも女の子の成績が高いというデータがありますので、その影響を受けることもあります。内申点はこのような生徒の文脈の影響を受けてしまうことが、統計的に実証されています。

また、先述のメルルは、高校教員へのインタビューをして、内申点の評価基準は高校間で異なることと、さまざまな採点のバイアスがあることを明らかにしています。内申点は生徒のパフォーマンスに基づいて付けられているだけではなくて、生徒のさまざまな社会的・学校的文脈によって、いわば作られているのだと言っています。

多くの先生は、一回目の授業で、生徒に個人票を書かせます。そこには以前の成績や、年齢、保護者の職業も書かせるのですが、それが評価の厳しさ・甘さに影響します。例えば、親が弁護士や医者や教師だったら、「たぶん良くできるだろう」という思い込みを無意識にしまうということなのです。

さらに、生徒や同僚との関係を良くしたい、教育効果を上げたいという、教育的な意図に基づいた内申点の調整もあると言っています。

以上のように、従来のバカロレア試験のような匿名の外部試験よりも、対面でなされる内申点評価のほうが学習成果を的確に把握できるという意見も、一方であります。しかし、もう一方で、内申点には、学校間格差や採点のバイアスが影響します。これらを妥当な経費で解決できるモデレーションの方法は、フランスではまだ開発されていません。他方、外部試験、匿名の試験の場合は、学校間格差や採点のバイアスの影響は少ないですが、運に左右されます。匿名の外部試験と内申点のどちらが公正かについて、まだ決着は付いていません。

(5) 日本の高大接続への示唆

以上を踏まえて、最後に、日本の高大接続への示唆に移ります。

まず、フランスの高大接続をめぐる論点を五つに整理します。

一つ目は、誰が大学入試の作問をするかです。フランスが行き着いた答えは、高校教員です。中等教育の習得度を問う問題を作るためには、大学教員ではなく、高校教員が作問の主体でないといけないということになりました。

二つ目は、論述試験の評価の信頼性をいかに確保するかということです。モデレーションの制度はできたのですが、あくまでも評価の観点、評価の規準だけを共有して、採点結果を統計的に調整するというモデレーションになりました。評価の各観点についてどのレベルまで要求するかという、評価の基準のほうは各採点者に任せています。統一の評価基準を強制すると、想定外だった創造性を評価できなくなるからです。つまり、評価基準を細かくしすぎると、評価できる思考力・表現力が狭まってしまうということです。

三つ目の論点は、高大間で何が接続していて、何が接続していないのかということです。次の三つのずれがあります。一つ目に、高校生のコース選択と受験生の関心のずれ。二つ目に、高校の職業系コースの教育内容と大学の教育内容のずれ。三つ目に、普通バカロレア試験の問題と大学で求められる学力の質は連続しているのだけれども、それについて問われるレベルが、バカロレア試験と大学間でずれているということです。バカロレア試験の採点が甘すぎて、大学で求められるレベルまで問うていないということです。

四つ目の論点は、受験準備勉強の抑制のために、大学入試に内申点を導入すべきかということです。これについては、抑制の効果よりも、内申点の公平性が欠けていることや、教師・生徒間の関係が悪くなること、情実の問題があることが重要視されてきました。

最後の論点が、内申点評価のほうが匿名の外部試験より公正かということです。これについては、まだ決着が付いているわけではありません。内申点は学習成果を的確に把握できるという面があるかもしれませんが、学校間格差や採点のバイアスが大きいのです。一方、外部試験の場合は、学校間格差や採点のバイアスは小さいけれども、運に左右されます。

以上のフランスの議論からは、日本への次の示唆が得られます。

まず、思考力・表現力の評価についてです。

初めに、妥当性、評価したいものを本当に評価しているかの問題です。日本では各大学が選抜しますので、大学教員が入試問題を作問してきました。しかしながら、大学教員はあくまで研究者であって、高校の教育内容の専門家ではありません。特に小規模大学では、当該の試験教科の専門家がいなかった場合もあり得ます。高校の各教科の知識だけでなく、それを活用する思考力・表現力も問う問題を、果たして大学教員が作成できるのか。大学入試における評価の妥当性というのが、日本では軽視されてきたのではないかと思います。

あくまでも高校の教育内容の専門家は高校教員です。したがって、高校教員に入試の作問に参画してもらうということ、全国的なレベルでも検討する必要があるのではないかと思います。知識だけでなく、思考力・判断力・表現力も問う問題を作るためには、高校教員をもっと専門職として位置付け直すべきではないかというのが、一つ目に言いたいことです。ただし、高校の先生は忙しいので、高校教員の労働時間削減策も必要だと思います。

二つ目は、信頼性の問題です。信頼性というのは、採点者間・採点者内で採点のぶれがないかということです。今回の高大接続改革の理念は、大学では思考力・判断力・表現力が必要になるので、入学してくる人にはその基礎を身に付けておいてほしいから、入試で問うというものです。

だからといって、思考力や表現力を入試で問いますので、その評価基準に採点者の裁量が少し入りますということを、国民が受け入れるかどうか。信頼性を多少不問にしても妥当性の確保が重要だという考えを国民が共有できるかといえば、厳しいでしょう。

日本の大学入試は、公平な手続きによる選抜なのだから落ちて仕方がないと国民を納得させる冷却装置であり、大学の基礎学力を受験生に身に付けさせるための加熱装置ではなかったという入試の社会的位置付けが、今後、思考力・判断力・表現力を評価する大学入試を進めていく上で障壁となるのではないかと考えます。

この日本人の公平性の感覚をどうにかしないと、思考力・判断力・表現力を評価する大学入試をしようとしても、結局、公平かどうか、公正かどうか、そのための手続きばかりが重視されて、思考力・判断力・表現力を評価するという妥当性のほうが置いてきぼりにされてしまうのではないかと危惧しています。

三つ目に、公正性の問題に移ります。

フランスで指摘されているように、内申点の高校間格差や採点のバイアス、これはもちろん日本でもあり得ることです。この公正性の問題への自覚が必要かと思えます。

日本では、内申点の高校間格差というのは指摘されていて、例えば、内申点について高校の偏差値によって傾斜配点を掛けるというようなことは行われていたとしても、内申点の採点のバイアスということはあまり重視されてこなかったのではないかと思います。公正性という概念について再検討する必要もあるのではないかと思います。

公正性という点、①、②、③の3通りの捉え方が考えられるのではないかと思います。おそれる日本では、①の、手続き重視の公正性が重視されてきたのではないかと思います。それゆえ、内申点の採点のバイアスということは、たぶんあるだろうと思いつつも、あまり気にしていないということがあったのではないのでしょうか。

①手続きが公平であれば、生徒の社会的背景や生来の属性に影響しても公正

②手続きの公平性と関係なく、生徒の社会的背景や生来の属性に影響されないのが公正

③恵まれない社会階層や地域の生徒を優遇するのは公正。手続きは公平ではないが。

一方、フランスでは、手続きの公平性とはあまり関係なく、生徒の社会的背景や生来の属性に影響されないのが公正であると、公平性と公正性を使い分けています(②に近い)。

また、韓国では特別選考という、恵まれない社会階層や地域の生徒を優遇する入試制度もあるそうです。手続きは公平ではなく、恵まれている社会階層の人にとっては不利になるわけですが、社会的公正を進めるので、公正なのだという考えもあります。

もしフランスのように、生徒の家庭環境が入試に影響するのは公正ではないと考えるのであれば、今、日本でも内申書改革がなされていますが、「留学や海外体験」という項目は内申書に入れるべきではないと思います。貧富の差が影響するからです。大学入試は貧富の差を測定するものではないはずですが。家庭環境が厳しい子どもだと、学力が高くても留学できないこともあります。貧富の差が影響する項目を内申書に入れるのは公正なのかどうか。

さらに、日本では、昨今の高大接続改革において、塾が重要なアクターとなっています。内申書の項目に塾などの私企業が介入することも今後あり得るかもしれません。内申書の項目は高校の教育目標に重大な影響を与えます。その項目の充足に向けて高校の教育実践が行われるからです。もし高校教育の目標に私企業が影響を与えることになるとしたら、それを公正と捉えるのかどうか。これは日本の国民の判断に任されているのかなと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。

(当日配布資料)

フランスの高大接続からのヒント —思考力・表現力と内申点の評価—

細尾萌子 (立命館大学)

hosoo@fc.ritsumei.ac.jp

(1) はじめに

・問題関心

戦後の大学入学者選抜実施要項では、大学入試の次の三原則が掲げられてきた。①能力・適性の原則（大学教育にふさわしい者を選抜）、②公正・妥当の原則、③高校教育尊重の原則である¹。しかし、高校教育は大学入試で乱され続けてきた²。

→高校教育の発展を助成する大学入試とは、に関心。バカロレア試験は高校教員が主体。

⇒日本の大学入試への高校教員の参画と、公正性の概念の再検討

・課題設定：

日本では、高大接続改革が進んでいる。各大学の一般入試については、次の二つの問題が指摘されている。一つ目は、知識の暗記・再生の評価に偏りがちであることである。二つ目は、複数の情報を統合し構造化して考えをまとめる力や、その過程や結果を表現する力が十分に評価されていないことである。AO入試や推薦入試については、一部が「学力不問」だと問題視されている。そこで各大学の入試を、「学力の3要素」（知識・技能、思考力・判断力・表現力、態度）を多面的・総合的に評価する選抜法に改善することが求められている³。

フランスの大学入試であるバカロレア試験は、200年近くも論述試験が中心であり、まさに上述の下線部の力を評価してきた⁴。バカロレア試験は、思考力・表現力を評価する大学入試の一つのモデルとなりえる。

しかしながら、フランスでは2021年から、バカロレア試験の40%を高校の内申点で評価する制度に改革される。高校の内申点が、大学入学の重要な要素となる。

日本にとっては、内申点の活用は自明のように思えるかもしれない。内申点を用いるAO入試や推薦入試が、すでに一般化しているからである（大学入学者の約4割を選抜）。だが、内申点の導入は、フランスにとって重要な意味を持つ。なぜなら、「共和国の学校」モデルの部分的な崩壊を意味するからである。バカロレア試験は、国家としての統一の学力規準を示すものであった。バカロレア試験に基づく知を平等に伝達することで、フランス共同体を維持・発展させる市民を育成するというのが、学校教育の建前であったのである。国家がコントロールできない内申点の導入は、その放棄につながりうる（教員の教育方法の自由）。

¹ 佐々木享『大学入試制度』大月書店、1984年、pp. 9-10。

² 細尾萌子「入試」田中耕治編『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房、2018年、pp. 10-111。

³ 高大接続システム改革会議『最終報告』2016年3月31日、pp. 3-7、pp. 41-47。

⁴ 細尾萌子「フランスのバカロレア試験で問われる学力と高校の教育目標との連続性—地理の試験問題と教科書の分析を通して—」『教育目標・評価学会紀要』第20号、2010年、pp. 29-38。

本講演では、フランスの高大接続における思考力・表現力と内申点の評価に関する論点を整理し、日本への示唆を述べる。その際、日本の大学入試と比較しやすい普通バカロレア試験を主に扱う。

(2) 現在 (2019-2020年度まで) の普通バカロレア試験の制度⁵

・フランスの学校

基本的に3年制(2歳就学の場合は4年制)の保育学校、6歳で入学する5年制の小学校、4年制の中学校、3年制の高校、さまざまな高等教育機関からなる(大学の学部は3年制)

・フランスの高校とバカロレア試験の対応

バカロレア試験は、高校2年生末と3年生末に全国一斉に実施。合格者には、中等教育の修了認定と高等教育の入学資格(バカロレア)が付与。合格者は基本的にどの大学にも入学でき、各大学の選抜試験は行われていない。2017年の合格率は全体で87.9%(普通バカロレア試験は90.7%)で、同一年齢層のバカロレア取得率は78.9%⁶。

高校2・3年生は、表1(3頁)のように、複数のコースにわかれている。バカロレア試験は、各コースに対応して実施。大きくは、普通バカロレア試験(普通教育中心)、技術バカロレア試験(普通バカロレア試験と職業バカロレア試験の中間的性格)、職業バカロレア試験(職業教育中心)の三種類。

いずれの試験に合格してどのバカロレアを取得しても、大学に入学できる。しかし、大学入学者の多くは普通バカロレア取得者(2017-2018年度は、大学新入生の81.9%が普通バカロレア取得者、11.9%が技術バカロレア取得者、4.2%が職業バカロレア取得者)。技術バカロレア取得者の主な進学先は短期の職業系高等教育機関(2017年は取得者の40.4%がSTSに進学)であり、職業バカロレア取得者の過半数は就職している(2017年は取得者の61.8%が就職)⁷。

普通バカロレア試験では、表2(4頁)のように、高校で履修したほとんどの教科が出題(12~16科目)。全教科の平均点が、20点満点中10点以上で合格。

合格者には、点数に応じて、「秀」(16点以上)、「優」(14点以上16点未満)、「良」(12点以上14点未満)の成績評価(mention)が与えられる。

試験の中心は、自由記述式の論述試験。選択肢問題はほとんどない(口述試験と実技試験もある⁸。体育・スポーツのみ、内申点で評価されるが、その傾斜配点は小さい)。

⁵ 細尾萌子『フランスでは学力をどう評価してきたか—教養とコンピテンシーのあいだ—』ミネルヴァ書房、2017年、pp. 16-21、pp. 60-61。

⁶ Fanny T., «Le baccalauréat 2017. Session de juin», in Note d'information, no. 17.18 du juillet 2017.

⁷ Ministère de l'Éducation nationale, Repères et références statistiques 2018, p. 158, p. 187.

⁸ 例えば、外国語の口述試験は、全国統一の評価基準に基づいて、担任教師が行う。英語の音声聞いてその内容をフランス語で書く試験と、既習の概念について英語で話して教師と質疑応答する試験(Note de service du 3 octobre 2011, B. O., no. 7, du 6 octobre 2011)。物理・化学の実技試験は、全国統一の問題バンクの中の問題について、担任教師ではない教師二名が行う。生徒は、問題の分析、実験方法の考案、実験の実施、仮説と結果の考察を行う(Note de service du 13 janvier 2014, B. O., no. 4, du 23 janvier 2014)。

表1 高校とバカロレア試験のコースの対応⁹

高校	系・専門領域	バカロレア試験
普通科	・経済・社会系 (ES) ・文学系 (L) ・科学系 (S)	当該の系の普通バカロレア試験
技術科	・工業・持続可能な発展系 (STI 2D) ・実験科学系 (STL) ・マネージメント・経営系 (STMG) ・健康・福祉系 (ST 2S) ・デザイン・応用芸術系 ・ホテル業・外食産業系 (STHR) ・音楽舞踊系 (TMD) ・農学・生物系 (STAV)	当該の系の技術バカロレア試験
職業科	工業製品整備、輸送、受付、販売、調理、写真 など100以上の専門領域	当該の専門領域の職業バカロレア試験

表2 科学系における高校第2・第3学年の教科とバカロレア試験教科の対応¹⁰

高校	バカロレア試験			
	試験教科名	配点指数	試験形式	時間 (時間)
必修教科 フランス語 個別課題学習 数学 物理・化学 生命・地球科学または 生態学・農学・領土または 工学 歴史・地理 第一外国語・第二外国語 哲学 体育・スポーツ 道徳・公民 個別学習支援	予備試験			
	フランス語	2	筆記	4
	フランス語	2	口述	1/3
	個別課題学習	2	口述	3人で0.5
	本試験			
	数学	7	筆記	4
	物理・化学	6	筆記・実技	3.5+1
	生命・地球科学または 生態学・農学・領土	6	筆記・実技	3.5+1
	または 工学	7	筆記・実技	3.5+1.5
	歴史・地理	6	筆記・口述	4+1/3
	第一外国語	3	筆記	3
	第二外国語	3	筆記・口述	3 (筆記)
	哲学	2	筆記・口述	2 (筆記)
	体育・スポーツ	3	筆記	4
	2	内申点		
専門教科 (3年) (1教科選択) 数学 物理・化学 生命・地球科学 情報・デジタル科学 生態学・農学・領土	専門教科 (1教科選択)			
	数学	9	筆記	4
	物理・化学	8	筆記・実技	3.5+1
	生命・地球科学	8	筆記・実技	3.5+1
	情報・デジタル科学	2	口述	1/3
生態学・農学・領土	2	口述	1/3	
自由選択教科 (最大2教科選択可) 第三外国語 ラテン語の言語と文化 ギリシャ語の言語と文化 体育・スポーツ 芸術 馬学・馬術 社会的・文化的実践 情報・デジタル創造 (高2のみ)	自由選択教科 (2教科受験可) 第三外国語、ラテン語、 ギリシャ語、体育・スポー ツ、芸術、馬学・馬術、 社会的・文化的実践、フ ランス手話	2 (ラテン語とギリ シャ語の傾 斜配点は3)	10点を越えた 点数のみ換算。	

(注) 生態学・農学・領土と、馬学・馬術、社会的・文化的実践は農業高校の生徒のみ。

⁹ フランスの国民教育省のホームページ<http://www.education.gouv.fr/cid52709/les-enseignements-de-premiere-et%20terminale.html>とEduscolのホームページ (2018年5月5日確認) <http://eduscol.education.fr/pid23236-cid47640/le-baccalaureat-professionnel.html> (同日確認) をもとに発表者が作成した。

¹⁰ EduSCOLのホームページ (<http://eduscol.education.fr/pid23233-cid58536/serie-s-a-partir-de-2013.html>, <http://eduscol.education.fr/cid66271/serie-s.html>, 2018年5月4日確認) をもとに発表者が作成。

●多様な高校の教員が作問

本土の問題は全国共通

図1のように、各教科の問題作成が大学区（本土を26に区分）間で割り振られ、各大学区に委員会が設置。視学官1名と大学教員1名が長で、委員は多様な高校の教員。委員は高校の学習指導要領に基づいて作問し、採点の方針を示す勧告を策定。各大学区で作られた問題と採点に関する勧告は、全国共通に使われる¹¹。

●なぜ多様な高校の教員が作問？

1808年の試験創設当初、作問者は大学教員だった。バカロレアは大学の第一学位なので。高校教育に不慣れな大学教員が作問した結果、バカロレア試験では、高校の教育内容の範囲を超える大量の知識が問われた。例えば、「寓話の「樅と葦」の筋をラテン語で物語りなさい」というラテン語作文（1853年）では、ラテン語の力があっても、高校で必ずしも学習しないこの話の筋を暗記していないと答えられない。そのため、高校では、暗記偏重の受験準備勉強（bachotage）がはびこった。この受験の弊害を克服するため、バカロレア試験の問題作成に、大学教員のみならず、多様な高校教員を参画させる改革¹²。

Cf. 改革の詳細

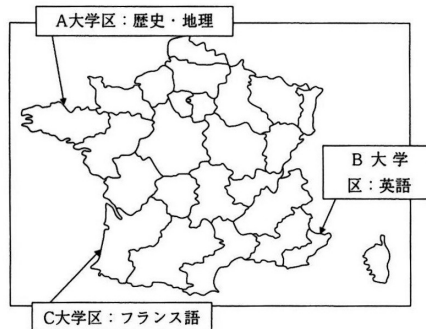
- ・大学教員団体である中等教育問題研究会の運動：高校教育の修得と大学教育への適性をともに測る試験にすべく、大学教員と高校教員を作問に参加させよう
- 1902年に、大学教員と高校教員が試験委員会に召集されるように。ただし、レベルの高い高校の教員が中心。
- ・問題が高校教育の範囲を超えていると、高校教員や保護者、生徒の非難が続く（1978年の数学の問題は難しすぎたと判断され、満点が通常の20点から28点に変更）
- 1986年：上述の問題作成委員会の設置義務付け（1996年に一部修正）

●採点者は高校教員。論述試験の評価の信頼性を確保すべく、採点者間で採点を調整するモデレーションの制度あり（1986年に勧告、1995年から各大学区に設置が義務化¹³）

- ①合意委員会：試験後に、採点者の一部が、数枚の答案を共同採点する研修。ここで決定された評価規準（評価の観点）は、採点者全員で共有。
- ②調整委員会：その後、高校教員が採点。終盤に採点者全員で調整委員会を開き、採点結果（得点分布の平均や分散など）を採点者間で統計的に調整。

図1 問題作成の割り振り

出典：細尾萌子『フランスでは学力をどう評価してきたか—教養とコンピテンシーのあいだ—』ミネルヴァ書房、2017年、p. 20。



¹¹ Note de service du 19 mars 1996, B. O., no.13, du 28 mars 1996.

¹² 細尾萌子「フランスのバカロレア試験における評価観—問題作成と採点に関する議論の歴史的検討を通じて—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第56号、2010年、pp. 391-394。

¹³ Note de service, No. 95-113, du 9 mai 1995, B. O., no. 20, du 18 mai 1995.

③合否判定委員会：採点終了後に、採点者間で採点結果を比較し、ばらつきが大きい場合は低い方の点数を上げる。また、高校の内申書の成績がバカロレア試験の得点よりもよい場合は、合否ラインの点数を数点上げられる。

→評価規準の共有、採点結果の統計的調整、内申書の斟酌による調整

●モデレーションで採点がほんとうに統一されているのか？¹⁴

・クレティユ大学区の歴史・地理の高校教員で、バカロレア試験の採点に15年携わっているカスチーロ (M. Castillo) 教員にインタビュー (2009年2月12日)。

クレティユ大学区では、合意委員会で作成された評価規準を採点者が共有。例えば2006年の地理「資料セットの検討」という問題では、次の四つの評価の観点を示された。

1. 簡潔に解答する
2. 資料内の情報と既有知識を結びつける
3. 資料内の情報を識別、比較、解釈、選択して関連づける
4. 洗練された表現をする

しかし、各観点においてどの程度できれば何点を与えるかという、各観点について求める水準は採点者に委ねられている。共通のループリックのような評価基準が作られないのは、事前に定めると、予想外の創造的な答案の良さを評価できなくなるため。

・ブルターニュ教職・教育高等学院 (ESPE) の教育評価論者メルル (P. Merle) がバカロレア試験の採点経験者32人にインタビュー (1991年)。文系教科では、評価基準について合意することは困難という回答が多い。「分析する」は事実、原因、結果の三つを述べるのか、事実と原因のみを書くので良いかなど、各観点への要求水準が教員間で異なるため。

→モデレーションの制度化により、評価規準 (評価の観点) が採点者間で共有されるようになった。しかし、各観点における要求水準は採点者各自に任せられ、統一されていない。答案の想定外の良さを評価したいという教員の考えや、要求水準をすり合わせる困難さがあるため。要求水準は、採点者間で統計的に少し調整しているだけ (上方調整のみ)。

(3) 高大間で何が接続して、何が接続していないか

●バカロレア試験は、高校の教育目標の達成度が大学教育を受けるのに十分かを見る大学入学資格試験。しかし、バカロレア試験に合格しながら、多くの大学新入生が落第。

¹⁴ 細尾萌子「フランスの大学における学業失敗の一因—高大間の学力の連続性に着目して—」『フランス教育学会紀要』第22号、2010年、pp. 82-83。

表3 2014-2015年度大学入学生の1年後の状況：取得したバカロレアの種類別

取得したバカロレアの種類	2年生進級率	落第率	離学率
全体	40.1 %	27.7 %	29.8 %
普通バカロレア	50.5 %	26.0 %	20.8 %
技術バカロレア	15.5 %	32.2 %	50.3 %
職業バカロレア	6.4 %	34.1 %	58.7 %

表4 2011-2012年度大学入学生の学業成果：バカロレア試験の成績別

バカロレア試験の成績	学生に占める割合	規定の3年間で修了する率	4年間で修了する率 (一年留年)
全体	100 %	27.2 %	11.8 %
秀 (16点以上)	2.1 %	64.6 %	7.0 %
優 (14点以上)	8.3 %	57.4 %	10.8 %
良 (12点以上)	23.2 %	40.0 %	13.8 %
成績評価なし・一次試験で合格	40.1 %	20.4 %	12.9 %
成績評価なし・追試験で合格	16.2 %	10.1 %	9.4 %

表5 2014-2015年度大学入学生の1年後の状況：大学の学問領域別

大学の学問領域	2年生進級率	落第率	離学率
法律・政治学	39.2 %	34.7 %	24.1 %
経済・経営学	38.9 %	27.6 %	30.7 %
経済・社会行政学 (AES)	25.5 %	30.9 %	41.3 %
文学・言語学・芸術	46.4 %	21.1 %	31.1 %
言語	38.4 %	25.9 %	34.1 %
人文・社会科学	43.5 %	22.9 %	31.8 %
生命地球宇宙科学	39.3 %	28.2 %	27.7 %
体育・スポーツ科学 (STAPS)	38.9 %	31.5 %	27.8 %
基礎科学・応用科学	42.4 %	27.9 %	25.6 %

表3～5の出典：Ministère de l'Education nationale de l'enseignement supérieur et de la recherche, « Parcours et réussite aux diplômes universitaires : les indicateurs de la session 2015 », Note Flash, No. 15, novembre 2016掲載の表を発表者が一部編集。

- ・大学新入生の2年生進級時に3割が落第、3割が離学（離学者は他機関への転学者もふくむ）。とくに技術バカロレアや職業バカロレアの取得者の落第・離学率が高い。
- ・バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高くなる。
- ・大学の学問領域によって、落第・離学の割合は異なる。とくに、職業バカロレア取得者の進学先として最も主流の「経済・社会行政学 (AES)」の落第・離学率が高い（職業バカロレアを取得して2016-2017年度に入学した大学生のうち、17.4%がAESに進学¹⁵⁾）。

¹⁵⁾ Ministère de l'Education nationale, Repères et références statistiques 2018, p. 189.

¹⁶⁾ 大場淳「フランスの大学における『学力低下』問題とその対応」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部』第52号、2003年、p.375。

●大学でなぜ大量に落第・離学するのか？

従来指摘されてきた二つの要因

1) 進路指導の問題

- ・中学校・高校の進路指導の欠陥（志願先の教育内容や必要な学力に関する情報不足）¹⁶

→生徒の多くは自身の関心ではなく、学力レベルとの対応で高校のコースを選択しており、コースと高等教育の進学先が対応していない。学力レベルが高い生徒は普通科の科学系、学力レベルが中くらいの生徒は普通科の経済・社会系か文学系、学力レベルの低い生徒は技術科か職業科を選択。普通科科学系の生徒の40%が、理系の学習を高等教育で継続しようと考えていない¹⁷。その結果、高校で学んだ内容と異なる学問領域に進学して、教育内容のギャップで学業失敗。大学の高大接続活動（リセ生徒への情報提供や入学後の学修支援・進路変更指導）が大学関係者の意識向上に寄与しているが、留年・中退を減らす効果は少ない¹⁸。

2) 高校の技術科や職業科から大学へというねじれ問題¹⁹

- ・職業教育中心の高校技術科・職業科と、普通教育中心の大学との教育内容のずれ
- ・技術バカロレアや職業バカロレアの取得者の多くは、大学ではなく、短期の職業系高等教育機関を志願するが、そこは大学と違って選抜制。不景気の影響で、職業資格がとれて就職につながりやすいとして、普通バカロレア取得者の志願者が増えている。そのため、普通バカロレア取得者と比べて学力面で劣る、技術バカロレアや職業バカロレアの取得者の一部は合格せず、やむなく無選抜制の大学に進学し、教育内容のギャップで学業失敗。

●普通バカロレア取得者で、大学の学問領域と類似したコースの出身者も多く落第。なぜ？

技術バカロレアや職業バカロレアの取得者よりはましだが、高い落第・離学率。1) や 2) の要因では説明がつかない。大学で学ぶ内容の基礎を高校で学んでいるはずであるが。

¹⁷ 細尾萌子・田川千尋・大場淳「フランスの高大接続改革の動向—バカロレア試験への内申点活用と進路選択システムの見直し—」『フランス教育学会紀要』第30号、2018年、p. 80。

¹⁸ 夏目達也「フランスの大学における高大接続の取組と教育改革」『名古屋高等教育研究』第18号、2018年、pp. 89-115。

¹⁹ 藤井佐知子「フランスにおける接続問題」荒井克弘・橋本昭彦編著『高校と大学の接続 入試選抜から教育接続へ』玉川大学出版部、2005年、pp.284-286。

表6 2014-2015年度大学入学生の1年後の状況：バカロレアの種類と学問領域別

取得したバカロレアの種類	大学の学問領域	2年生進級率	落第率	離学率
普通バカロレアの文学系	文学・言語学・芸術	52.4 %	21.8 %	24.9 %
普通バカロレアの文学系	人文・社会科学	49.2 %	25.9 %	23.6 %
普通バカロレアの経済・社会系	経済・経営学	45.0 %	26.9 %	24.2 %
普通バカロレアの経済・社会系	人文・社会科学	57.6 %	18.5 %	21.5 %
普通バカロレアの科学系	生命地球宇宙科学	48.8 %	26.6 %	19.5 %
普通バカロレアの科学系	基礎科学・応用科学	52.2 %	26.1 %	17.1 %

出典：Ministère de l'Éducation nationale de l'enseignement supérieur et de la recherche, « Parcours et réussite aux diplômes universitaires : les indicateurs de la session 2015 », Note Flash, No. 15, novembre 2016掲載の表を発表者が一部編集。

●普通バカロレア試験で問われる力と大学で求められる力は乖離している？²⁰

普通バカロレア試験で全員が受験する歴史・地理のうち2006年の地理（科学系）を例に、バカロレア試験問題と大学の成績評価のそれぞれに表れた学力像を分析する（同年の歴史・地理のバカロレア試験では20点満点中12点と、歴史よりも地理の配点の方が大きい）。

受験生は地理の小論文2問と「資料セットの検討 (étude d'un ensemble documentaire)」1問のうち、1題を選択。このうち、「資料セットの検討」を分析（3問は同じ難易度）。

表7に示した通り、この問題は2部からなる。第1部は資料を分析する5問の短答問題である。第2部では第1部の解答と資料内の情報、知識を総合し、「アメリカ：グローバリゼーションにどのような役割を果たしているか」について論述する。

ここで、典型例として第1部第3問を検討する。二つの資料をもとに、「アメリカの金融の流れを特色づけよ」という問題である。資料1の模範解答が付されている。

表7 「資料セットの検討」の各問題と資料

問題	問題文	資料	
第1部	第1問	「世界の商品貿易におけるアメリカの地位はどのようなものか」	「商品貿易（2003年）」(図)
	第2問	「アメリカの大企業のテリトリー戦略について何を表わしているか」	「世界におけるナイキ社」(図)
	第3問	「アメリカの金融の流れを特色づけよ」	「アメリカの海外直接投資（出入）」(図) 「世界の金融システムにおけるアメリカの役割」(文章)
	第4問	「アメリカ映画の勢力の特徴と限界を述べよ」	「映画制作社世界トップ15（2004年）」(表)
	第5問	「資料セットに欠けている主題に関する側面をあげよ」	資料セット（第1-4問の資料全体）
第2部	「アメリカ：グローバル化にどのような役割を果たしているか？」	資料セット（第1-4問の資料全体）	

出典：Baccalauréat général Session 2006 Histoire-Géographie Série:S、レンヌ大学区のHP。
(http://www2.ac-rennes.fr/crdp/doc/docadmin/sujets/examens/_1115161806_010.pdf, 2010.03.06.)

²⁰ 細尾萌子「フランスの大学における学業失敗の一因—高大間の学力の連続性に着目して—」『フランス教育学会紀要』第22号、2010年、pp.73-81。

資料1 第3問の模範解答

アメリカは世界の金融流通の主な担い手である。特に多国籍企業の生産投資（海外直接投資）で資金を得ている。世界中に投資しているが、消費者が多い西ヨーロッパとアメリカ大陸に主に投資している。一方、アフリカやアジアへの投資は活発ではない。他の方法で資金調達できるためである。また、広大な市場が海外の投資者を引きつけており、海外直接投資の受け手でもある。さらに、ドルは世界通貨という特色を強調しなければならぬ。そのおかげで、自国の貿易赤字を南半球の国々に払ってもらえている。

出典：Orientations pour la correction baccalauréat 2006 Consignes et indications de correction、レンヌ大学区のHP。（http://www.2.ac-rennes.fr/crdp/doc/docadmin/sujets/examens/_1115161830_008.pdf, 2010.03.06.）

この問題では以下の四つの力が求められている。第一に情報の取り出しである。「アメリカの海外直接投資（出入）」という図から、「西ヨーロッパとアメリカ大陸に主に投資している。一方、アフリカやアジアへの投資は活発ではない」ことを、「世界の金融システムにおけるアメリカの役割」という文章から、世界通貨であるドルと貿易赤字の関係を読み取る。第二に、資料内の情報と知識（海外直接投資の定義など）から、必要なものを選ぶ力である。第三に、先進国からは相互の投資で、発展途上国からは借金の利子で資金を得ているという概念に基づき、選んだ資料内の情報と知識を関連づける力である。第四に、事象を海外直接投資の出入と融資の二つにまとめ、その要因と結びつけて表現する力である。

このようにバカロレア試験問題では、複数の種類の資料から取り出した情報と知識を取捨選択し、それらを概念に基づいて関連づけ、論理の構成や展開を工夫して文章で表現する力が求められる。

続いて、大学の成績評価に表れた学力像を分析する。例として、パリ第1大学の経済学部における、第1 Semesterの必修科目の「一国経済の記述的説明（économie descriptive）」を取り上げる（同学部の2006年の第2学年進級率は51%であり、全国平均（53%）に近い。1学年は二つのSemester制）。この科目は、マクロ経済学の1分野である国民経済計算の入門講義である（単位数が6と最も大きい科目の一つである上、どの科目も成績評価の方法は同じ。国民経済計算とは1年間に行われた一国の経済活動全体を組織的に表示する方式）。

この科目ではまず予習用教材で予習し、教材の問いに文章で答える。分からない点は、指導つき学習の時間（週1回1時間半）に講義の担当教員の指導を受ける。この時間に問いの解答が集められ、平常点がつけられる。次に講義（週1回3時間）が行われ、Semester末に試験が実施される。この平常点と試験の成績は、それぞれ50%で合算される。そこで、予習用教材による平常点評価と試験が問う学力を抽出する。

初めに平常点評価をみてみよう。その際、第1回目の指導つき学習で提出される予習用教材「国民経済計算は役に立つ！」を分析する（新入生が入学直後に解く教材であり、バカロレア試験の学力像との接続が最も問われると考えられるため）。

この教材は4章からなる（1. 経済の成長とその推進力（1）・（2）、2. 付加価値の分配、3. 国内総生産を超えて、4. 購買力の問題）。各章には、文章や表、グラフをもとに、主に文章で解

答するいくつかの問いが記されている。ここでは例として、複数の資料を用いて文章で解答する1(1)(表8)で問われた力を分析する。

この問いでは第一に、経済成長に影響する項目などの資料からの取り出しが求められている。第二に、消費支出などのある項目の変化が国内総生産の成長に占める割合を国内総生産寄与度と呼ぶなどの、知識も必要とされている。第三に、複数の資料内の情報や知識から必要なものを選択し、文章で表現する力が期待されている。

表8 第1回目の予習用教材「国民経済計算は役に立つ!」1(1)

	資 料	問 い
1. 経済成長とその推進力(1)	2009年のフランスの国民勘定に関する四つの文章(①国内総生産の成長が停滞、②家計の消費支出は拡大⇔総固定資本形成と貿易、在庫品変動は減少、③経済成長が輸出増大で回復、④不況から脱出)と、国内総生産及び各項目の国内総生産寄与度を示すグラフ	1. 「フランス経済」とは何を意味するか? 2. 何が経済成長率を測定しているか? 3. どのような指標によって経済の健康度は判断されているか? 4. 経済成長の様々な推進力を挙げよ。 5. 消費支出はなぜ固定資本総形成よりも国内総生産の変動にいつそう寄与しているのか?

出典：パリ第1大学経済学部の教員・学生用HP (http://epi.univ-paris1.fr/28418008/0/fiche___pagelibre/&RH=epi-043-MM0002v29&RF=epi-043,2010.03.06) をもとに発表者が作成。表9と資料2の出典も同上。

次いで、表9の2009年の試験問題を検討する。問題形式は、次の三つに分類できる。

- ・ア) 資料を使わずに文章で解答する問題(問題3と指定参考書の問題)
- ・イ) 文章からデータを抽出して計算・説明する問題(問題1と5)
- ・ウ) 表からデータを抽出して計算・説明する問題(問題2と4、6)

ア)では、知識を国債などの概念で結びつける力が問われている。イ)では、資料2の模範解答のように、文章から取り出した情報と知識を、金融勘定と資本勘定の意味などの高度の概念に基づいて関連づける力が必要とされている。ウ)では、非金融法人企業の所得勘定の意味などの高度の概念を用いて、表から取り出した情報を組織化することが求められている。

以上のように、複数の種類の資料から取り出した情報と知識を取捨選択し、それを高度の概念で結びつけ、論理の構成や展開を工夫して表現する力が試されている。このような大学の学力像は、高度の概念を求める違いはあるが、普通バカロレア試験の学力像に近い。試験問題で問われる学力の質は、バカロレア試験と大学間で発展的に連続しているといえる。

資料2 試験の問題1の模範解答

2006年から2007年の純賃金の乗数係数は、 $625.3 \div 597.9$ で1.046である。同期間の価額の乗数係数は1.02である。そのため同期間の純賃金の購買力は、 $1.046 \div 1.02$ で2.5%増加した。したがって賃金の購買力は2.5%上昇した。しかし、家計の購買力は一般的に家計の可処分所得の購買力をさし、賃金の購買力ではない。可処分所得には、賃金以外の要素(社会保障給付や利子、配当、営業余剰)が含まれる。それゆえ、ここから家計の購買力を結論づけることはできない。

表9 2009年の「一国経済の記述的説明」の試験問題

配点	問題文	問題形式																																																	
問題1 (2点)	2006年から2007年で、家計に支払われた純賃金と公務員の純俸給は、5979億ユーロから6253億ユーロに上昇し、消費支出価格係数は2%増加した。この期間に家計の購買力は増加したといえるか？それはなぜか？	文章からデータを抽出し、文章で解答																																																	
問題2 (3点)	次の表を用いて、1997年から2007年の国債増加率（価額）への国家と社会保障行政の寄与度を計算し、説明せよ。 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>マーストリヒトの国債</td> <td>1997</td> <td>2007</td> </tr> <tr> <td>国家</td> <td>562,9</td> <td>930,0</td> </tr> <tr> <td>社会保障行政</td> <td>25,1</td> <td>46,4</td> </tr> <tr> <td>一般政府全体</td> <td>751,3</td> <td>1209,5</td> </tr> </table>	マーストリヒトの国債	1997	2007	国家	562,9	930,0	社会保障行政	25,1	46,4	一般政府全体	751,3	1209,5	表からデータを抽出し、数式と文章で解答																																					
マーストリヒトの国債	1997	2007																																																	
国家	562,9	930,0																																																	
社会保障行政	25,1	46,4																																																	
一般政府全体	751,3	1209,5																																																	
問題3 (2点)	国債とは何か？国債が大きくなるとなぜ問題が起こりうるのか？	資料を使わずに文章で解答																																																	
問題4 (4点) 1 (0.5点) 2 (0.5点) 3 (3点)	自動車産業（auto）とその他の工業・農業（API）、財務代理期間サービス（SOF）の三つの産業からなる経済を想定する。この経済の収支表は2008年のデータとして作られている。金融危機の後、2009年の最終需要は財務代理期間サービスでは100減少し、自動車産業では50減少する。 1. 技術係数（coefficient technique）の行列を計算せよ。 2. レオンチェフの仮説を説明せよ。 3. この最終需要の減少の経済への影響を分析し、新しい収支表を作成し、説明せよ。 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>生産</td> <td></td> <td>Auto</td> <td>API</td> <td>SOF</td> <td>中間消費</td> <td>最終消費</td> </tr> <tr> <td>200</td> <td>Auto</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>600</td> <td>API</td> <td>100</td> <td>200</td> <td>100</td> <td>400</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>200</td> <td>SOF</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td></td> <td>中間消費</td> <td>100</td> <td>200</td> <td>100</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>付加価値</td> <td>100</td> <td>400</td> <td>100</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>生産</td> <td>200</td> <td>600</td> <td>200</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	生産		Auto	API	SOF	中間消費	最終消費	200	Auto	0	0	0	0	200	600	API	100	200	100	400	200	200	SOF	0	0	0	0	200		中間消費	100	200	100				付加価値	100	400	100				生産	200	600	200			表からデータを抽出し、数式と文章、表で解答
生産		Auto	API	SOF	中間消費	最終消費																																													
200	Auto	0	0	0	0	200																																													
600	API	100	200	100	400	200																																													
200	SOF	0	0	0	0	200																																													
	中間消費	100	200	100																																															
	付加価値	100	400	100																																															
	生産	200	600	200																																															
問題5 (3点) 1 (1.5点) 2 (0.5点) 3 (1点)	家計の金融取引に関する次の情報が与えられている。n年度の家計は社債と流通債権を60億ユーロ購入し、それを20億ユーロで売却した。銀行には600億ユーロの貯蓄があり、銀行口座から200億ユーロを支払いに使用した。140億ユーロの株券と1000億ユーロの生命保険契約を取得した。家計のうち、個人企業は20億ユーロの融資を受け、過去の債権の返済を60億ユーロ受け取った。また、商業融資に対して80億ユーロ返済した。さらに、家計全体で、銀行から900億ユーロの債券を獲得した。 1. 家計の金融勘定を行い、n年度の家計の金融取引のバランスを計算せよ。 2. 家計の資本勘定のバランスはどのようなようになるはずか？ 3. 家計が取得した株券の残高はn-1年度末で9250億ユーロであったとすると、n年度の株券の購入は家計の金融資産にどのような影響を与えたかを示せ。n年度末のこの残高の価額を決定できるか？解答を説明せよ。	文章からデータを抽出し、文章と表で解答																																																	
問題6 (5点) 1 (1点) 2 (各割合につき0.5点で計2点) 3 (2点)	非金融法人企業に関する次の情報が与えられている。 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td>非金融法人企業（時価10億ユーロ単位）</td> <td>2000</td> <td>2007</td> </tr> <tr> <td>総付加価値</td> <td>725.5</td> <td>957.1</td> </tr> <tr> <td>雇業者報酬</td> <td>468.3</td> <td>62.8</td> </tr> <tr> <td>生産物に課されるその他の税</td> <td>38.2</td> <td>51.6</td> </tr> <tr> <td>総営業余剰</td> <td>226.5</td> <td>299.0</td> </tr> <tr> <td>支払済利子</td> <td>16.7</td> <td>29.2</td> </tr> <tr> <td>分配済純配当</td> <td>43.3</td> <td>76.6</td> </tr> <tr> <td>総貯蓄</td> <td>119.4</td> <td>121.3</td> </tr> <tr> <td>固定資本総形成</td> <td>143.2</td> <td>199.8</td> </tr> <tr> <td>資金調達能力(+)または需要(-)</td> <td>-28.4</td> <td>-78.1</td> </tr> </table> 1. 上の表から、2007年に非金融法人企業が受け取った経常補助金の金額を決定せよ。 2. 2000年と2007年の非金融法人企業の貸金率と投資率、貯蓄率、株の配当の資本収益率を計算せよ。 3. 2の結果を用いて、非金融法人企業の自己投資率が2000年から2007年でこれほど低下した理由を説明せよ。	非金融法人企業（時価10億ユーロ単位）	2000	2007	総付加価値	725.5	957.1	雇業者報酬	468.3	62.8	生産物に課されるその他の税	38.2	51.6	総営業余剰	226.5	299.0	支払済利子	16.7	29.2	分配済純配当	43.3	76.6	総貯蓄	119.4	121.3	固定資本総形成	143.2	199.8	資金調達能力(+)または需要(-)	-28.4	-78.1	表からデータを抽出し、数式と文章で解答																			
非金融法人企業（時価10億ユーロ単位）	2000	2007																																																	
総付加価値	725.5	957.1																																																	
雇業者報酬	468.3	62.8																																																	
生産物に課されるその他の税	38.2	51.6																																																	
総営業余剰	226.5	299.0																																																	
支払済利子	16.7	29.2																																																	
分配済純配当	43.3	76.6																																																	
総貯蓄	119.4	121.3																																																	
固定資本総形成	143.2	199.8																																																	
資金調達能力(+)または需要(-)	-28.4	-78.1																																																	
指定参考書の問題 (3点)	持続的発展とは何か？今日使われている持続的発展の指標をいくつか挙げよ。フランスの持続的発展の長所と短所は何か？	資料を使わずに文章で解答																																																	

●普通バカロレア試験問題と大学間で学力像は発展的に連続しているのに、何が断絶？²¹

・バカロレア試験の評価基準が甘すぎて、学力像通りの評価ができていないのでは
(AO入試は総合的な資質・能力を評価するはずだが、実際は全入の場合もあるのと同様)

・先述のメルルは、バカロレア試験の評価基準は、①行政的圧力と②同僚教員の圧力という採点への圧力を受けて調整されているという。

①の圧力としては、合意委員会で視学官から、寛大な採点を求める勧告が出される。

②の圧力として、厳しい採点を行った教員は、採点期間中の非公式の交流や調整委員会で、委員会全体の平均に要求水準を揃えるように同僚教員から注意される。

この圧力による加点は、「80%目標」を受け、1990年代から散見されるようになった。「80%目標」とは、高校最終学年に到達する者の割合を当該年齢層の80%に伸ばし、バカロレア試験合格者の増大をめざす計画をさす(1985年にシュベスマン文相が経済競争力強化を目的に発表)。

採点への圧力によって評価基準が甘くされる事態は、国民教育省職員のポシェット(C. Pauchet)も指摘している。実際に、2008年の哲学の普通バカロレア試験に関するクレティユ大学区の視学官の勧告では、高い点数をつけることが促され、理解度よりも努力を評価するように指示されている(「低い点数は、特に欠陥がみられる答案に留めなければならない」「問題が完全に理解されていなくても、思考や論証を正確に記述し、構成し、活用する努力がはっきりと認められる答案には、低い点数をつけてはいけない」)。前述のカスチーロも、2008年の歴史・地理のバカロレア試験の合意委員会では、「視学官の勧告に基づいて、寛大な採点をする」と決めた(毎年のように)」と述べている。

以上のように、バカロレア試験問題と大学間で、求める学力像は発展的に連続している。だが、「80%目標」達成のために甘い採点を促す圧力がかけられ、バカロレア試験の採点者は要求水準を下げざるを得ない。その結果、大学教育を受けるのに不十分な水準の者も合格する。このように、バカロレア試験の評価基準が甘くされ、試験で実際に問われる力が大学の要求する力と連続していないことが、落第・離学の一因である可能性がある。

8頁で先述したように、バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高くなる。バカロレア試験の評価基準を厳しくさえすれば、落第・離学を減少させられるのでは(「80%目標」がネックになるが)。

(4) バカロレア試験改革：内申点は公正か²²

・2018年から、入学者を学力(主に高校の内申点)も参照して振分ける高等教育進路選択システム(Parcoursup)が導入。バカロレア取得者は大学には基本的に全入という原則の廃止(くわしくは注22の論文を参照)。

・2021年から、バカロレア試験改革。バカロレア試験の40%を高校の内申点で評価。

²¹ 細尾萌子「フランスの大学における学業失敗の一因—高大間の学力の連続性に着目して—」『フランス教育学会紀要』第22号、2010年、p. 83。

●改革の背景

- ①短期間で知識を詰め込む受験準備勉強の緩和→バカロレア試験改革
試験一発勝負ではなく、高校での学習成果を長期的に評価しよう
- ②大規模・複雑になったバカロレア試験の簡素・軽量化→バカロレア試験改革
2900種類の作問や400万枚の答案の採点に高校教員が動員され、試験期の6月は通常の授業ができないことが問題視。内申点なら大幅なコストダウン。
- ③大学入学後に多い留年・離学への対策→高等教育進路選択システム

●高校改革の内容：普通科

2020-2021年度より、新しい高校・バカロレア試験制度が完全実施。普通バカロレア試験と技術バカロレア試験が改革の対象。高校技術科のコースは残るが、普通科の従来のコース（文学系／科学系／経済・社会系）は廃止され、一つのコースになる。

改革後の高校2年生・3年生の科目は、表10（16頁）の通り（全員必修の「共通教養の基礎」が7科目、選択必修の専門科目が2年生は3科目、3年生は2科目、進路指導が必修、選択科目が2年生は1科目まで、3年生は2科目まで）。コースに縛られず、高等教育の進学先を見すえて科目選択できる。

●普通バカロレア試験改革の内容

新試験では、高校での内申点（contrôle continu）が試験の40%、従来の最終試験が60%を占めるようになる。筆記試験は4科目に減少する。

内申点40%のうち、30%は生徒が履修した科目の共通試験の点数、10%は「学習記録簿」（各教科の担任教師による日常的な成績簿）の点数である。共通試験は、各高校で、高校教員が実施する。

共通試験に関しては、生徒間・学校間の平等を確保すべく、次の三つの工夫（詳細は未定）。

1. 全国共通の問題バンクから各高校が選択した問題で実施。
2. 匿名採点（生徒の担任教師ではない教師が、名前を見ずに採点）。
3. 採点者間で評価基準を調整（harmonisation）。

まとめると、高2・高3は、表11の通り、公的な試験が年に3回行われ、各教科の日々の成績も試験の点数に算入されることになる。高2末と高3末に1回ずつ試験があるだけの従来の制度と比べると、生徒を継続的に評価する制度に変わっている。

²² 細尾萌子・田川千尋・大場淳「フランスの高大接続改革の動向—バカロレア試験への内申点活用と進路選択システムの見直し—」『フランス教育学会紀要』第30号、2018年、pp. 77-88。

表10 高校普通科 2 年生・3 年生の科目一覧

		科目名	2 年生	3 年生
共通教養の基礎		フランス語	4 時間	
		哲学		4 時間
		歴史地理	3 時間	3 時間
		道徳・公民	30分	30分
		第一・第二外国語	4 時間半	4 時間
		体育・スポーツ	2 時間	2 時間
		科学的・デジタル人文学	2 時間	2 時間
		計	16時間	15時間半
専門科目 (2 年生は 3 科目を選択。 3 年生はそのうち 2 科目を選択)		芸術	4 時間	6 時間
		歴史地理・地政学・政治学	4 時間	6 時間
		人文学・文学・哲学	4 時間	6 時間
		言語・外国文学	4 時間	6 時間
		数学	4 時間	6 時間
		デジタル・情報科学	4 時間	6 時間
		生命地球科学	4 時間	6 時間
		工学 (技術科と関連した時間設定)	・・・	・・・
		経済社会科学	4 時間	6 時間
		物理化学	4 時間	6 時間
		計	12時間	12時間
進路指導 (グループ活動や学力別教育など、学校裁量の活動)			1 時間半	1 時間半
選択科目		芸術 / 古代の言語と文化 / 体育・スポーツ / 第三外国語の中から最大 1 科目を選択	3 時間	
		上記の科目と、専門数学 / 補充数学 / 法律と現代社会の重要課題の中から最大 2 科目を選択		3 時間
		総 計	32時間半	31時間半

出典：Ministère de l'Éducation nationale, Baccalauréat 2021, le 14 février 2018, p.19.

表11 高校普通科の試験・評価スケジュール (発表者作成)

・高校2年の1月と4月：内申点をつける共通試験	9～6月：学習記録簿の評価
・高校2年の6月：フランス語の最終試験 (筆記と口述)	
・高校3年の12月：内申点をつける共通試験	9～6月：学習記録簿の評価
・高校3年の4月頃：専門科目2科目の最終試験 (筆記)	
・高校3年の6月：哲学 (筆記) と専門科目 (口述) の最終試験	

●バカロレア試験への内申点導入に関する論点

1) 受験準備勉強を収めるために、バカロレア試験に内申点を導入すべきか

内申点導入をめぐるっては、1808年の試験創設後まもなくから議論が始まっている。

先述したように、当初は大学教員が作問していたが、大学教員は中等教育の内容に不慣れだったため、バカロレア試験では、中等教育の内容を超える知識が問われていた。

そのため高校では、暗記偏重の受験準備勉強がはびこっていた。生徒は授業に集中せず、受験

参考書の学習に没頭していた。

そこで、生徒を継続的に学習させるべく、内申点の導入が国会で検討されてきた。1896年にはコンプ文相が、翌年にはランボ文相が法案を提出しているが、いずれも廃案になる。中等学校の学校間格差や、保護者や生徒が教員に圧力をかけて成績に影響する恐れにより、試験の公平性を担保できないことが理由であった。

高校改革に向けた1983年の報告書でも、パリ第一大学の歴史家プロが、受験準備勉強を抑制すべく、内申点の一部導入を提案している。

この内申点について、フランス最大の中等教員組合であるSNESは、反対の立場を貫いてきた。反対の理由は、次の3点である。①保護者が学校に圧力をかけうる。②教師が教育者ではなく選抜者になり、教師と生徒の関係が変質する。③通う高校によって取得したバカロレアの価値が異なってしまう、不平等になる。

このように、受験準備勉強の抑制のために、内申点の導入が絶えず提案されてきた。しかし、受験準備勉強抑制の可能性よりも、公平性の欠如と、教師・生徒間の関係悪化や情実の問題が重要視され、内申点は導入されてこなかった。

2) 日常的な学習成果を評価できる内申点評価の方が一発勝負の外部試験より公正か

内申点か外部試験（匿名の試験）のどちらが公正か、つまり、生徒の社会的背景や生来の属性に影響されずに学習成果を評価できるかという点についても、議論が展開されてきた。

内申点の方が公正だとする主張の理由は主に次の二つである。一つ目は、日頃生徒に面している担任教師が、学習の質を最もよく判断できるというものである。もう一つは、外部試験では運で成否が決まる（慣れた問題か、当日の体調がいいかなど）が、内申点の方が運に左右されにくいというものである。

一方、内申点評価は、生徒の落第歴・出身社会階層・性別などの影響を受けることが、統計的に実証されている。

また、先述のメルルは、高校教員へのインタビューにより、①内申点の評価基準が高校間で異なることと、②様々な採点のバイアスがあることを明らかにしている。内申点は、生徒のさまざまな社会的・学校的文脈によって「作られている」。多くの教師は第一回目の授業で、生徒に個人票を書かせる。そこに書かれた以前の成績や、年齢（落第の有無）、保護者の職業などが、評価の厳しさ・甘さに影響している。さらに、生徒や同僚との関係を良好に保ち、教育効果を上げるために、内申点は調整されている。

Cf. 調整の例

1. クラスの秩序を保つために、騒がしい生徒への制裁として点数を低くする。
2. 生徒の学習意欲を保つため、点数の上限と下限を設ける（3～17点など）。
3. 生徒の学力レベルによって意欲の高め方は違うので、評価の厳しさを調整する。
4. 同僚の教師と点数分布が同様になるように、課題の難易度や配点を調整する。

以上のように、外部試験よりも、対面でなされる内申点評価の方が、学習成果を的確に把握できるという意見がある。しかし内申点には、学校間格差や採点のバイアスが影響する。これを妥当な経費で解決するモデレーションの方法はまだない。他方、外部試験の場合、学校間格差や採

点のバイアスの影響は少ないが、運に左右される。匿名の外部試験と内申点のどちらが公正かについて、決着はついていない。

(5) 日本の高大接続への示唆

1) フランスの高大接続をめぐる五つの論点

①誰が大学入試の作問をするか

中等教育の習得度を問う試験問題を作成するため、作問者が、大学教員から高校教員に転換

②論述試験の評価の信頼性をいかに確保するか

評価の観点(評価規準)を採点者間で共有し、採点結果を統計的に調整するモデレーション
評価の各観点についてどのレベルまで要求するか(評価基準)は採点者に任せる。統一の評価基準を強制すると、想定外だった創造性を評価できなくなるから(評価できる思考力・表現力の狭まり)

③高大間で何が接続していて、何が接続していないのか

- ・高校のコース選択と受験生の関心(大学で学びたい内容)のずれ
- ・高校の職業系コースの教育内容と大学の教育内容のずれ
- ・普通バカロレア試験問題と大学で求められる学力の質は連続しているが、問われるレベルが違う。バカロレア試験の採点が甘すぎて、大学で求められるレベルまで問うていない。

④受験準備勉強の抑制のために、大学入試に内申点を導入すべきか

抑制の効果よりも、内申点の公平性の欠如(学校間格差)や、教師・生徒間の関係悪化、情実の問題が重要視

⑤内申点評価の方が、匿名の外部試験より公正か

決着はつかず

内申点：○学習成果を的確に把握

×学校間格差や採点のバイアスが大きい

外部試験：○学校間格差や採点のバイアスが小さい

×運に左右される

2) 思考力・表現力の評価について

・妥当性(評価したいものを本当に評価しているか)の問題

日本では各大学が受験者を選抜するため、大学教員が入試問題を作問してきた。しかしながら、大学教員は、高校の教育内容の専門家ではない。高校の各教科の知識だけでなく、それを活用する思考力・表現力も問う問題を、大学教員がはたして作成できるのか。大学入試における評価の妥当性を担保するためには、高校教員の労働時間削減策とセットで、高校教員の作問への参画を検討する必要があるのでは(専門職としての高校教員の可能性)。

・信頼性（採点者間・採点者内で採点のぶれがないか）の問題

大学で必要となる思考力・表現力を入試で問うことは大切なので、その評価基準に採点者の裁量が入っても受け入れる感覚、信頼性を多少不問にしても妥当性の確保が重要だという考えを国民が共有できるか。日本の大学入試は、公平な手続きによる選抜だから落ちても仕方がないと国民を納得させる冷却装置であり、大学教育の基礎学力を受験生に身につけさせる加熱装置ではなかったという入試の社会的位置づけが、思考力・表現力を評価する大学入試の障壁となるのでは。

Cf. 学力担保（質保証）と大学経営の矛盾する関係をいかに解決するか

学力担保の観点からは、大学で最低限必要となる基礎学力の水準未達の学生は入試で落とすべきである。だが、合格者の減少は大学の経営悪化に直結するため、とくに私立大学では、採点を甘くして、要求水準を下げざるを得ないことも。その場合、試験問題としては思考力・表現力を問うていたとしても、実際に問われる力は、基礎学力の水準未満になる可能性も。

3) 内申点の評価について：公正性の問題

・内申点の高校間格差や採点のバイアスといった、公正性の問題への自覚が必要。公正性の概念について再検討する必要もある。

①手続きが公平であれば、生徒の社会的背景や生来の属性が影響しても公正

→日本ではこの手続き重視の公正性が重要視？

②手続きの公平性と関係なく、生徒の社会的背景や生来の属性に影響されないのが公正

→フランスはこちらよりか

③恵まれない社会階層や地域の生徒を優遇するのは公正。手続きは公平ではないが。

（例：韓国の特別選考（1994年導入）では、特異な才能を持つ生徒や社会的に恵まれない層の生徒を対象とし、教科学力以外の要素を取り入れ、多様な評価とルートで選抜。2005年時点で、韓国全体で、入学者総数の36.6%がこのルートで入学²³）

もし②のように、家庭環境が影響するのは公正ではないと考えるならば、内申書の項目として、「留学・海外経験」は入れるべきではない。貧富の差が影響するからである。

また、内申書の項目に塾などの私企業が介入するとしたら、それは公正なのか。フランスのバカロレア試験は国家試験であるため、塾は高大接続のアクターではない。他方、日本では高大接続改革において、塾が重要なアクターとなっている（①大学入学共通テストの記述式問題の採点は民間事業者に委託、②英語の4技能は民間の資格・検定試験でも評価、③JAPAN e-Portfolioの運営をベネッセコーポレーションがサポート）。内申書の項目は、高校の教育目標に重大な影響を与える。その項目の充足に向けて教育実践が行われるからである。公教育の目標に私企業の意向が反映されるのは公正なのだろうか。

²³ 南部広孝「東アジア諸国における大学入試改革の動向」日本教育学会研究集会「大学入試のあり方を問う—国際比較を通して」2018年5月12日の発表資料、https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231904/1/jera_kinki_kenkyu2018_3.pdf、2018年10月22日確認。

●主要参考文献●

- ・細尾萌子・田川千尋・大場淳「フランスの高大接続改革の動向—バカロレア試験への内申点活用と進路選択システムの見直し—」『フランス教育学会紀要』第30号、2018年、pp. 77-88。
- ・細尾萌子『フランスでは学力をどう評価してきたか—教養とコンピテンシーのあいだ—』ミネルヴァ書房、2017年。
- ・細尾萌子「フランスの大学における学業失敗の一因—高大間の学力の連続性に着目して—」『フランス教育学会紀要』第22号、2010年、pp.73-86。
- ・細尾萌子「フランスのバカロレア試験で問われる学力と高校の教育目標との連続性—地理の試験問題と教科書の分析を通して—」『教育目標・評価学会紀要』第20号、2010年、pp. 29-38。
- ・細尾萌子「フランスのバカロレア試験における評価観—問題作成と採点に関する議論の歴史的検討を通じて—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第56号、2010年、pp. 387-399。

* 本講演は、JSPS科研費17H07253「研究活動スタート支援」(2017～2018年度、研究代表者：細尾萌子)「論述型の大学入試に向けた高校での指導・評価法の研究：フランスでの取り組みを通して」の助成を受けたものである。